台、高速の撚機も八台設備し都城には下請工場を持ち、例年三百頓の製品を生産し、地元には高令者を対象にスイカネットの内職を奨励し生産して頂き、高令者の方達より「我等の生き甲斐」と喜ばれておりますが、如何せん日本一のロープ王を目指している私も寄る年には勝てず、平成三年十月後継者がいないが為、会社一切の権限を東京インキに引継いでもらい、この会社が出資して社名もトーイン加工株式会社として発足しました。初代の社長として、東京インキの常務取締役、本間久毫氏が兼務で就任された後、同取締役、横田義彦氏が就任、現在同じく東洋インキより増田満承氏が就任、都城に住して日夜努力され、工場も平成五年四月、一千四百平方米の近代的工場を新設され、更に増産すべく大型の機械が毎年の如く設備され、私が心ひそかに思っていた日本一のロープ王の夢も果されるものと期待しています。

尚現在工場には、私の身内で、乙房町平田の守山浩平氏が工場長として働いており、私はこの会社の顧問として籍を置き、従業員は地区の人を主に二十名余り勤務しており、永勤者は農協時代からの人も居り、働き易い、近代にマッチした職場で、増田社長の指導のもとに益々繁栄していくものと思います。

「おかあさん、お米がなくなりました」

千草　鎌田　厳

戦中、戦後を通して、この千草地区にも沖縄からの疎開者があったことをご存じの方も、今ではすくなくなりました。

この事を伝えることの意義を感じ、戦争への反省になればと念じ、ここに私の亡き母ナミの当時の手記を書きます。

現文のまま

戦争がはげしくなった昭和十八、十九年ごろの事です。

その頃、地区の隣組班長さんが沖縄の疎開者四世帯十五名を引受けてきて、愛国婦人会に面倒を見るよう言いつけられました。

沖縄の人たちは、はじめは言葉もよくわからず、大変かわいそうな身なりをしていました。米の配給が足らず、お米や薪がなくなると私の家に来て、「おかあさん、お米がなくなりました。」「薪がなくなりました。」と泣きついてきます。

私は役員会を開き、お米はごはんを仕こむ前にサカズキ一ぱ

いずつたくわえてもらい、疎開者が仕事のできるまで面倒を見て、戦争の苦しみをわけあいました。

そして仕事のない時には自分の家の仕事を手伝ってもらったりしました。

四年間のうちには、又吉真忠さんのように、その四世帯の中から出征する方もあり、同じ家族のように、面会には赤飯を作り、親子ともども汽車に乗って、鹿児島の航空隊に出かけたこともありました。親子連れの疎開者は汽車に乗るにも言葉がよくわからないので、「おかあさん、いっしょに行ってね」とすがるので、私も家のことはさておいて一緒について行ったものでした。

こうして一生けんめい「戦争に勝つために」とつとめましたが、次々と戦死の公報が来るのです。

きょうは会員のご主人に赤紙がくるかと思えば、こちらではまだ結婚もしていない息子さんの戦死の公報がくる。

私はすぐかけつけてご挨拶をしました。また召集された家からの出征祝いの招待をうけると、処女会長（当時女子青年会を処女会と云っていた）と二人で千人針を持って行き、粗末ではありましたが門出の挨拶をしました。

私は一人ひとりの手をにぎり、「銃後のことは私どもがひきうけますから」と力強く言ったものでしたが、それも水のあわとなったのです。

昭和二十年八月十五日、戦死者の初盆のため家庭訪問しているうちに「終戦」の放送を聞きました。

妻と幼な子三人残して御主人が出征される時は、「勝ってくるぞと勇ましく」小旗をふってその元気な姿を見送った私でしたが、その時はもう声をはりあげて泣きました。

二十六歳の戦争未亡人の平山さんは、幼い子供三人をかかえ力を落として「これからどうしようか」と赤ちゃんをだっこしながら泣きふされるのでした。

私はそれをなぐさめつつ沖縄の疎開者たちは敗戦がわかったろうかと思ってかけつけますと、棚原という人が私にだきついて、「おかあさん、私たちはどうなるのでしょう」と、子供のようにみんなして泣き出しました。

それから八か月ほどというものは何の通知もなく、私は大きな農家に「日雇いに使ってあげて下さい」と頼んで回りました。

この戦中戦後の四年間ほどのうちに、子供達もだんだん手がかからないようになっており、みんなは毎日農業につとめるようになりました。

もうひさば（千草）の人同様にことばもなれて、仕事もでき

るようになり、時どき夜に私が出かけて行くと、大へん喜んで沖縄の三味線を弾いて歌ってきかせてくれたり、まるで実母のように喜んでくれました。

明けて昭和二十一年四月に、やっと沖縄への引揚げの通知が来て、みんなはわがふる里に帰る喜びと別れの悲しさで一ぱいでした。その頃は、衣料の配給もなくただ母親四人分と子供達それぞれに古着が配られましたが、どれもこれもだぶだぶでみっともないかっこうでした。

そこで、私は婦人会の皆さんに呼びかけて協力してもらい、親も子も日本人らしい姿に着付けさせ、公民館でひさばの皆さんと記念写真を写して別れることにしました。

今もその写真を眺めると涙が先立ちます。

註、亡き母ナミの事については「庄内」九号に赤池和秋さんが「老母と一兵士」に書いています。

ねずみ　電線を渡る

千草　長友久二

あの日は、どんよりと曇った冬空で北西の風がすごい勢いで吹いていた。

昭和九年一月六日、お昼ちょっと前だったでしょうか。カンカンと半鐘が打鳴らされ、ごく近くのサイレンが続けざまに鳴り響いた。

この日は谷頭のせいば（馬のせり市）で、はりあげる声とたくさんな人でごった返していたが、「こりゃ、火事はひさばじゃが」という声で、せりも中断して大騒動になった。

私も親に連れられて田圃のあぜ道を飛ぶように走った。

上ん原から見ると、火元は公民館（この頃は矢野商店、今の中尾酒店の南にあった）の東側であることがわかった。

親子は、ほっと胸をなでおろしたものだった。

くや通りは、火の粉がものすごくとても入れそうにないので、北郷ぼりを通ろうとしたが、遅れてかけつけた手動ポンプと走りまわる消防隊でごったがえしていた。